

【第1990回例会 卓話】令和4年4月19日（火）

ケニアプロジェクトを終えて

山口 修代

ケニアの活動、今から思うとずいぶんと稚拙で未熟な活動の始まりでした。そんな始まりの活動が国際奉仕活動として形になったこと、このことについてはケニアに関わってくださった多くの方々の温かな心と大きなご協力、そのことに尽きるかと思っています。

多くの方に助けていただき何とかケニアに行きましたが、渡航にあたりずいぶんと悩みました。私には三人の子どもがおりますが、ひとり親の家庭です。当時一番下の子どもは中学二年生、義務教育中の子どもです。担任の先生に手紙を書き事情を説明し、お世話になっている周囲の人たちをお願いをしながら渡航の準備を進めました。

心配は子供のことだけではありません。共に渡航する会員の社会的な立場やご家族のことを思うと、無事に帰ってくることを祈るしかできない自分に不甲斐なさを感じていました。その時の自分にできることを全力で準備したつもりでしたが、同時に同じくらいそういった気持ちも持ち合わせての出発でした。

行ってみれば何一つストレスもなく、安全に過ごすことができたのですが、これもまた大きな協力のおかげであることを改めて感じることとなりました。

ケニアでの活動では自分にとってたくさんの大きな出会いがありました。ケニアのことがなければ、おそらく私の人生において関わることのなかった方たちです。この出会いには心から感謝をしています。このようにケニアでの活動は私自身には大変素晴らしい出会いをもたらしてくれましたが、一方で私の子どもたちにはまた別の気持ちももたらしたようです。

先ほども申し上げたように渡航にあたりできる限りの準備はしたつもりでしたが、帰国後一年ぐらいたってから娘が全く別の会話の中で『あなたが亡くなった時のシミュレーションはケニアに行ったときにできていますからご心配なく〜』とさりと言いました。

娘はかる〜い口調で言っていました。その軽さも帰国後すぐに言わないことも彼女流の私への理解と思いやりであり、ケニアでの活動は素晴らしい大きな出会いと共に私に小さな後悔ももたらしました。このことは今後、私と子どもたちにとって、とても大切な距離感となっていくように思います。それはもちろん良い意味での距離感です。これを自立と呼ぶのだろうかと感じています。

また、昨年クラブで取り組んだ子どもたちへの学習支援活動。この活動には広報委員として何度も柏市との打ち合わせに同行をし、子どもたちを取り巻く現状を学びました。この学習支援はケニアでの活動で何となく感じていたことがはっきりとした形になって私の心に収まった活動でした。

『ひとり親家庭』と呼ばれること、日常の生活では聞き流すことであっても外に向けて一歩踏み出そうとする時にはひどく実感させられる言葉です。コロナによりひとり親家庭が直面した様々な問題は、いつでも私自身、私の子どもたちにも降りかかってくることであります。でも、ひとり親であるから、ひとり親家庭の子どもであるから、そんな理由で自分の未来を狭めてしまてはいけないと思うのです。特に子どもに関しては、社会の制度が子どもたちを取りこぼさないよう大人はその都度立ち止まり考えなければいけないと感じます。どの国のどんな環境の子どもたちも、本来子どもたちの未来は前途洋々のはずです。

私がこれらの活動を通して感じたことは、愛に満ちた熱意と客観的な目線を併せ持つこと、何より強



い心、そして体力。このことがどれほど重要なことかということです。

最後はやはりバイタリティが勝負かと。

ケニアの活動に限らず、全てのことはずっとそこにとどまり続けるのではなく、過ぎ去って行き、また新たなことに出会います。ケニアでの出会いやケニアで見たことなどそのどれもが私の心の中には鮮明に刻まれています。それでもケニアの活動は過ぎ去ったことです。ケニアのことは自分の心の中に大切にしまい、今、目の前にあることに対してひたすら手を動かして作業をする、そんな日常を大事にしたいと考えます。

松下さんはメールの最後にいつも決まって『どうぞお仲間のみなさんによろしく！』と書いてくださいました。『お仲間』松下さんらしい言葉で、私、とても気に入っています。大事にしたい言葉です。

以上となります。ありがとうございました。

ケニア訪問ビフォーアフター

米谷昌紀



2018年3月27日にロータリークラブに入会し、新年度の2018年7月からは広報・公共イメージ向上委員会に配属になりました。その時の広報委員長が山口さんで、広報委員の福田さんとお二人が中心になり、新たな広報の体制作りの為にとどても尽力をされていました。

そのお二人が広報活動の一環でケニアプロジェクトを企画していて、自分自身はプロジェクトの内容もロータリーの事も良くわからない状況の中で、目の前の仲間の人達の力になれることは、何かないかを考えました。そして、自分なりに出した答えがケニアに行ってプロジェクトを盛り上げることであり、またこのような機会がないとアフリカにも行くチャンスは

ないと思い、ケニア行きを決めました。

幸い、妻も快く賛成してくれたお陰で、ケニアに行くことが出来ました。

2019年10月に、音楽を通じてケニアの子供たちに笑顔を届けようという目的で、ケニアに行きました。現地へ行き異文化を体験し、色々な所を視察して、日本以上の貧富の差や地域格差が激しく、貧困により教育や医療、子育て支援がまだまだ不十分だということを肌で感じる事が出来、とても貴重な体験をすることが出来ました。

また単純な事ですが、音楽には国境も言葉の壁もなく、人を笑顔にさせる素晴らしい力がある事。そして笑顔は人と人とを結ぶ愛の素敵な架け橋で、笑顔にも国境がない事を改めて感じました。

そのような中で、ケニア行きのきっかけである福田さんとトランペット奏者との出会いから、人のご縁が繋がり、ケニア日本人学校とのご縁で、地区補助金でのケニア訪問、モヨ・チルドレンセンター創設者の今は亡き松下照美さんとのご縁、そこから今回の母子の健康をテーマにしたグローバル補助金の相手先であるティカ・ロータリークラブとのご縁、パートナーシップへと繋がりました。

人との良い出会い、そして人と人とのご縁や繋がりに、感謝の気持ちでいっぱいです。

自分自身、ケニアプロジェクトはただ行っただけで、何もやっていないのですが、今年度2021年7月からは、地区の国際奉仕委員会のメンバーになり、ケニアプロジェクトや国際奉仕について話を求められて、つたない体験・知識をお話する事で、ロータリーの中でも少しは人のお役に立てているのかなあ…と、感じています。

また、ケニアから帰国して二年余り、紆余曲折はありましたが、今回のグローバル補助金事業で援助した出産施設で、赤ちゃんが生まれたことは、なにものにも変えられない達成感、感動を味わうことが出来て、ケニアに行って本当に良かったと感じています。

ロータリークラブに入会していなければ、経験する事が無かったであろう、このような機会を作っていた柏南ロータリークラブに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。